

琉球大学学術リポジトリ

日本人学童との誤答対照分析を中心にしたスウェーデン人日本語学習者の漢字習得過程の認知的研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2012-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: イーヴァソン, 房枝, Ivarsson, Fusae, イエーテボリ大学文学部 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24143

日本人学童との誤答対照分析を中心にした スウェーデン人日本語学習者の漢字習得過程の認知的研究

イーヴァソン 房枝

1. はじめに

スウェーデンのイエーテボリ大学 (University of Gothenburg) 文学部言語文学科 (日本語) の博士課程に入るまで同学科で十年余り講師を務め、初・中級を中心とした全科目の指導を経験した中で、スウェーデン人学習者の漢字習得過程の認知的側面に特に興味を持つようになったことが本研究開始のきっかけである。琉球大学とイエーテボリ大学の学部間交流協定の発足を記念して今回研究レベルにおいても交流の機会を与えられ、本研究の核となる調査の前段階ではあるが、本紀要をお読みの方々のご意見をいただけたらと思い、投稿させていただいた。

2. 研究の背景

日本語学習における漢字習得が特に非漢字系学習者にとって大きな負担となっていることは以前から指摘されているが、近年は IT 関連技術の発達により手書きの機会が減少したことに伴い、習得すべき書字能力の水準の再検討も大きな問題の一つとなっている。

漢字学習に関する研究は長年行われているが、本研究が参考とする認知的アプローチによる対照分析関連の研究のうち、本稿では (a) 既習漢字数の多寡で対照した加納他 (1989) 及び (b) オーストラリアの大学生と日本人大学生を対照した Hatta, Kawakami, Tamaoka (1998) について言及する。

自由放出法による漢字知識の分析を行った (a) においては、非漢字系学習者から成る同一グループのコース前・中・後期における既習漢字数の差による段階的な傾向の違いが見

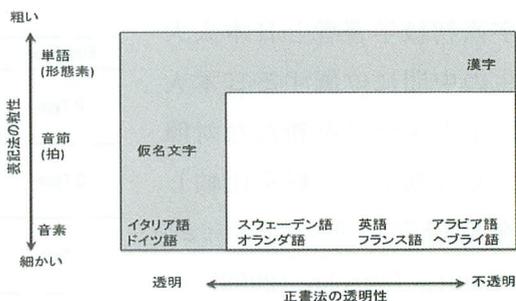


図1 表記法の粒性及び正書法の透明性
(ワイデル 2008 と Perfetti, Dunlap2008 に基づき作成)

出されているものの、学習者の母語が様々であり、母語の正書法に統一がなく、同じアルファベット系でも言語ごとに正書法の透明性が異なる(図1参照)ため、母語の違いの調査結果への影響を計ることはできない。たとえば、正書法の不透明な(=発音と綴字の関連が不規則な)英語が母語である者と、正書法の透明な(基本的に発音と綴字が一対一対応をなす)イタリア語を母語とする者とで、日本語の漢字の不透明さ(異音同字・異訓同字・同音異義語が多い)がそれぞれの漢字習得過程にどのような影響を及ぼしているか、ということまでは調べられないのである。

誤字の分類と傾向分析を行った(b)においては、各群内の母語は統一されているが、各群の既習漢字数(学習者推定約250字に対し母語話者2000字超)のほか、誤字の抽出方法が異なる(学習者は大学初級日本語コースの単元毎の漢字小テストにおける誤答、母語話者は大学のコース課題レポート中の誤字)。結果として「学習者には漢字の字形を成していない非漢字型エラーが、母語話者には同音異字等の音韻関連エラーが多い」(Hatta, Kawakami, Tamaoka1998)とされているが、傾向の違いは既習字数の差に起因するところが大であると思われる。既習字数の少ない学習者は、漢字の基本形に不慣れなため非漢字(NK)型エラーが多く、形態相似字・同音字・類義字のストックも少ないので、音韻(P)型・形態(O)型・意味(S)型、その各種組み合わせ、逆転(R)型といった、非漢字型以外のタイプの誤字を生じる素地が非常に小さいのである(分類と例については表1を参照)。両群の誤字パターンの差は、漢字初心者による新出字の習得途上における書字エラーと、常用漢字の日常的使用者が習得済み漢字を記憶違いや不注意により誤記した場合のパターンの差であると言えよう。

このことは、Hatta, Kawakami, Tamaoka (1998)の調査に、非漢字系初級学習者と日本人大学生の間位置する日本人中学生グループを新たな対照群として加え、3群を比較した発展研究であるHatta, Kawakami, Tamaoka (2002)の調査によっても裏付けられている。日本語教育の分野ではないが、FMRI(機能的核磁気

表1 日本人学生の誤字のタイプ分類と例
(Hatta, Kawakami, Tamaoka1998:462)

Error Type	Samples	Error Type	Samples
P Type	/sha kai/ /sha kai/ 社回 for 社会 (society)	O+S Type	/tai zoku/ /ji zoku/ 待続 for 持続 (to maintain)
O Type	/i setsu/ /ki setsu/ 委節 for 季節 (season)	P+O+S Type	/shin to/ /shin to/ 浸透 for 浸透 (penetration)
S Type	/sen zan/ /sen puku/ 潜存 for 潜伏 (concealment)	NK Type	/ho ---/ /ho ken/ 保建 for 保健 (sanitation)
P+O Type	/i shiki/ /i shiki/ 意識 for 意識 (consciousness)	R Type	/dan han/ /han dan/ 断判 for 判断 (judgment)
P+S Type	/sei shin/ /sei shin/ 精心 for 精神 (mind)	Other Type	/maki geki/ /shi geki/ 牧激 for 刺激 (stimulus)

共鳴画像法)を用いたNelson他(2005)の研究においては、非漢字系成人学習者(英語母語話者)が大学コースでの漢字(中国語)の学習開始後1年で、以前には使用されていなかった脳の部分(漢字使用者に顕著な賦活化が見られる部分)が賦活化していることが確認されている。このことから、漢字の未習者/初心者は漢字認知に利用されるべき部分が賦活化していない「非漢字化脳」の、漢字上級者の脳は漢字認知関連分野が顕著に賦活化した「漢字化脳」の持ち主であり、脳の「漢字化」は、大学の外国語コースという学習環境における成人学習者による1年程度の学習で変化が確認できるものであることが推測される。また、上述のHatta, Kawakami, Tamaoka(1998)は、形態型・音韻型・意味型といった異なる誤字タイプは漢字の認知機能の異なる部分の誤作動の結果である⁽¹⁾と仮定している。Nelson他(2005)及びHatta, Kawakami, Tamaoka(1998, 2002)を統合すると、漢字認知機能の発達、すなわち漢字認知関連の脳の部位の賦活化(脳の漢字化)は漢字の習得に従って起き、脳の漢字認知機能の異なる分野の誤作動の結果としての誤字の出現パターンは、漢字認知機能の発達度の影響を受けていると推測される。既習漢字数を指標とする漢字習得レベルにより漢字認知機能の基本的発達度が予測できるため、習得レベルを同等にした主群と対照群を比較することで、漢字認知機能発達度の差ではなく、各群の当該段階での認知的特徴そのものの解明が可能となる。

スウェーデン人日本語学習者の漢字習得過程を認知的に分析することを目的とする本研究が、既習漢字数を揃えたスウェーデン人学習者と日本語母語話者のグループの誤答の対照分析を中心として計画されているのは、以上のような背景によるものである。また、主群の学習者は成人(大学生)であり、対照群には年齢層・基本的教育水準の同等な被験者を選定すべきであるが、漢字習得レベル・年齢層・基本的教育水準の全ての面で同等な成人日本語母語話者を確保することは事実上不可能である。そのため、漢字習得レベルの一致を必須条件とすると、対照群の被験者となり得るのは日本人小学生となる。

3. 研究の目的

本研究の目的は、スウェーデン人日本語学習者の漢字習得過程について、(1) L2正書法習得におけるL1正書法の影響、(2)習得過程の各段階における特徴、(3)認知的特性と誤答パターンの相関関係、及び(4)書字能力と読字能力の相関関係を明らかにすることである。さらに、本研究による解明事項をスウェーデン人日本語学習者の漢字

指導に将来的に応用し、その学習効果を高めることを目標とする。

3.1. L2 正書法習得におけるL1 正書法の影響

主群被験者はL1（母語）の正書法を習得済みの成人であり、その母語はスウェーデン語に統一されている。L1の正書法習得途上の日本人小学生との対照分析を行うことで、主群被験者のL1であるスウェーデン語の粒性が細かく（1字素1音素対応）中程度の透明性（音韻と綴字の対応の規則性）を有する正書法が、L2（学習対象語）である日本語の大粒（1字素1形態素対応）で不透明な漢字と中粒（1字素1音節／拍対応）で透明な仮名の混交文からなる正書法の習得に及ぼす影響を探る⁽²⁾。本研究の結果スウェーデン語母語話者群について見出だされ得る日本語母語話者群との傾向の違いが、スウェーデン語母語話者独自のものなのか、また非漢字系学習者に共通のものなのかについては、今後英語やイタリア語等、正書法の透明性の異なる他の非漢字系言語の母語話者を対象に同様の調査を行い本研究の調査結果と比較することによって確認することが期待される。

3.2. 習得過程の各段階における特徴

習得過程の段階ごとの変化を調べるため、既習漢字数を240字及び約1,000字の2段階設定し、主群・対照群とも該当する2つのサブグループにより構成されるものとする。各段階は、主群の学習者においては初級後半（Bコース）及び上級（E／Fコース）に、対照群においては小学校第2学年及び第6学年に、それぞれ該当する。

3.3. 認知的特性と誤答パターンの相関関係

被験者個人の認知的特性と誤答パターンの相関関係（「視覚記憶に秀でた者においては形態型の誤字が少ない」等）を探ることにより、誤答パターンの傾向が、母語の正書法の影響によるものか、個人の認知的特性の違いによるものかの判断を試みる。被験者の認知特性のテストとして、視覚関連については成・高芝・小池（2006）の研究⁽³⁾において使用された記憶実験用の各検査を、聴覚関連については聴取音（非語）の同定や書き取りを主とした聴覚記憶検査・音韻綴字化検査を予定している。

3.4. 書字能力と読字能力の相関関係

漢字の書字・読字能力のテストを実施し、その相関関係を探る。「書ける字」より

「読める字」の方が多いというのは一般的な経験則であるが，総合初等教育研究所（2005）の「小学校学年別配当漢字の習得状況に関する調査研究」の結果，漢字習得途上の学童においても書字問題より読字問題のほうが正答率が高いことが確認されている。読字と書字の成績の差は学年が進むほど大きくなり，高学年における書字の平均習得率は読字のその約7割である（総合初等教育研究所2005）。手書きの機会が減り，キーボードによる書字が一般的になった中で，「キーボード書字に必要とされるのは運筆能力ではなく液晶画面に表示された変換候補漢字の正誤判断の能力であるから，正確に手書きできなくても読めればよい」という考え方が台頭しつつあるが，「字形の複雑な漢字の細部の差異を認め正誤を瞬時に判断する視認力は，運筆能力に培われたものである」とする意見も根強い。書字成績と読字成績の文字単位・被験者単位での比例関係（「書ける字ほど読める」・「書字能力の高い被験者ほど読字能力も高い」）が数値化されれば，手書き書字能力習得の重要性の度合いが明らかになるものと思われる。

4. 調査計画の概要

本研究のための調査計画の概要は，2010年10月現在，以下の通りである。

4.1. 調査対象

予定されている調査対象は表2の通りである。

表2 調査対象(予定)

既習字数	スウェーデン人日本語学習者 (主群)	日本人小学生 (対照群)
240字	スウェーデン西部の大学の日本語Bコース学生約40名 スウェーデン南部の大学の日本語Bコース学生約40名 ⁽⁴⁾	別府市内の小学校2年生約50名 長野市内の小学校2年生約50名
1,000字	スウェーデン西部の大学の日本語E/Fコース学生約15名 スウェーデン南部の大学の日本語Eコース学生約10名 ⁽⁵⁾	別府市内の小学校6年生約50名 長野市内の小学校6年生約50名

4.2. 調査内容

(1) 240字レベル

スウェーデン西部の大学で使用されている初級漢字教科書(Banno他 2009)⁽⁶⁾の最初の240字及び教育漢字学年配当表の2学年の配当漢字160字中、共通する101字につき各群とも既習字が240字に達した時点(主群: Bコースの2月, 対照群: 2学年の3月)で下記(3)・(4)の検査, 並びに(5)の検査を実施する。

(2) 約1,000字レベル

学年配当表の6学年の教育漢字181字中、日本語能力試験2級までの配当漢字1,023字に含まれないものを除いた108字につき下記(3)・(4)の検査, 並びに(5)の検査を, 主群については随時, 対照群については既習字が1,006字に達した時点(6学年の3月)で実施する。主群の実施時期を特定しないのは, 上級では漢字は独習となる関係で主群被験者の既習字1,000字到達時点が特定できないためである。上級コースの日本語学力は2級相当と設定されているため1,000字既習とみなし, 随時の実施とする。

(3) 漢字読み書き能力検査(筆記解答)

- ① 書字能力 文中の平仮名で書かれた指定語を漢字(と送り仮名)で書く。
- ② 読字能力 文中の漢字で書かれた指定語を平仮名で書く。

用例に対する親近性の違いが成績に反映することのないよう, 問題中の語や文は可能な限り各群の使用教科書から取る。総合初等教育研究所(2005)の「書くことの習得状況についての検査」の集計法に倣い, 書字・読字両方の検査について正答率・無答率・誤答率を算出する。書字の誤答の分類法はHatta, Kawakami, Tamaoka(1998, 2002)の誤字タイプ分類(音韻型, 形態型, 意味型, 音韻・形態型, 音韻・意味型, 形態・意味型, 音韻・形態・意味型, 非漢字型, 逆転型, その他)に基づき, 一部修正・細分化したものをを用いる。読字の誤答は, 形態相似字(または類義字)の読みを書いてしまう形態(または意味)型, 長音添加型・促音省略型・清濁転換型等の音韻型のほか, 音訓転換型, 送り仮名依存型等の分類が考えられる。

(4) 漢字視認能力検査(多肢選択法)

- ① 同音字選択 例: {工/公/交} 園であそぶ。
- ② 相似字形選択 例: {父/文/交} 通事故が多い。
- ③ 類義字選択 例: 色 {異/違/誤} いのスカートを買った。

(5) 記憶検査

表3の記憶検査のうち，発達的变化が顕著ではなかった（成・高芝・小池 2006）とされる位置記憶を除いた図形記憶・視覚運動記憶（字課題・非字課題）の各検査，並びに 3.3. に記載の聴覚記憶・音韻綴字化の検査を実施する。

4.3. 調査方法

漢字読み書き能力検査・漢字視認検査は，既習字数別・教育機関別のグループごとの一斉筆記テストとする。成・高芝・小池（2006）の検査法に則り，図形記憶検査は視覚刺激の呈示と解答を漢

字の画要素のカードで行い，視覚運動記憶検査は視覚刺激をコンピュータ画面で呈示し筆記で解答するものとする。聴覚記憶・音韻綴字化の検査は，聴覚刺激をコンピュータ音声で呈示し筆記で解答するものとする。

4.4. 調査時期

予定されている調査時期は表4の通りである。

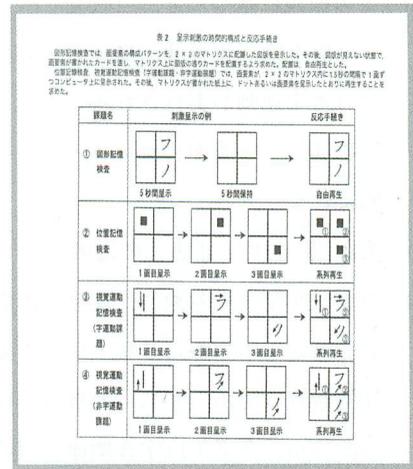
表4 調査時期(予定)

既習字数	スウェーデン人日本語学習者（主群）	日本人小学生（対照群）
240字	2011年2月	2011年3月
1,000字	2011年冬～春	2011年3月

5. まとめ

本研究は，スウェーデン人日本語学習者の漢字習得過程を日本人学童との誤答対照分析を中心とした各種調査を通じて認知的に分析することを目的とする。そのため，既習漢字数レベルを240字と約1,000字の2段階設定し，主群被験者をスウェーデンの大学日本語科の学生（初級後半・上級），対照群被験者を日本人小学生（2年生・6年生）とする漢字の読み書き・視認能力検査及び視覚・聴覚関連の記憶検査の実施を2011年春に予定している。今回，検査実施前ではあるが，琉球大学とイェーテボリ大学の研究交流の一環として投稿させていただいた。お読みくださった皆様からご意見を頂戴できれば幸甚である。

表3 記憶検査の例
成・高芝・小池 2006:183)



註

- (1) この仮説に基づくと、「社会」→「社回」の誤記は、脳機能の視覚記憶・聴覚記憶・意味理解3分野を賦活化させ、形・音・義の3要素の合致確認後、正字である「会」の運動記憶が喚起され書字運動が実行されるべきところ、音のみの一致で「回」の書字につながったもの、また、「季節」→「委節」は、音・義の検証が省略され形の類似のみに触発された書字である、と説明できる。
- (2) 表記法の粒性と正書法の透明性については、図1を参照のこと。
- (3) 日本人小学生を対象に、漢字の形態の学習に関与すると思われる図形記憶、位置記憶、視覚運動記憶の1年生から6年生までの発達的变化について検討。記憶実験を行い、その結果を総合初等教育研究所(2005)の教育漢字の読み・書きに関する調査結果の傾向(低学年は字形関連の誤答が、高学年は字音関連の誤答が多い)と対照し、相関関係の学年別特徴を探る。結果：漢字書字において、低学年では視覚運動の発達が、高学年では図形記憶の発達が書字習得に影響している。
- (4)・(5) 協力依頼交渉中。
- (6) スウェーデン南部の大学の学生被験者群については当該大学での使用教科書で代替する。

引用ならびに参考文献

- Banno E., Ikeda Y., Shinagawa K., Tajima K. & Tokashiki K. (2009) *Kanji Look and Learn: 512 Kanji with illustrations and Mnemonic Hints*. The Japan Times, Ltd., Tokyo.
- Hatta T., Kawakami A. & Tamaoka K. (1998) "Writing errors in Japanese kanji: A study with Japanese students and foreign learners of Japanese." *Reading and Writing* 10, 457-70.
- Hatta T., Kawakami A. & Tamaoka K. (2002) "Errors in writing Japanese kanji: A comparison of Japanese schoolchildren, college students and second-language learners of Japanese." *Asian Pacific Journal of Speech, Language and Hearing* 7, 157-66.
- Nelson J., Liu Y., Fiez J. & Perfetti C.A. (2005) "Learning to read Chinese as a second language recruits Chinese-specific visual word form areas." In: *the 12th annual meeting of the Society for the Scientific Study of Reading*, Toronto, Ontario.
- Perfetti C.A. & Dunlap S. (2008) "General principles and writing system variations." In: *Learning to Read Across Languages* (eds. by Koda K & Zehler AM), pp. 13-38. Routledge, New York.
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・阿久津智・石井恵理子・海保博之・出口毅(1989)「自由放法による外国人の漢字知識の分析」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』第4号,

筑波大学留学生教育センター，65-91.

財団法人総合初等教育研究所（2005）『教育漢字の読み・書きに関する調査と研究』文溪堂.

成基香・高芝秀幸・小池敏英（2006）「漢字の画要素記憶の発達に関する検討」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第57号，東京学芸大学総合教育科学系，181-188.

タエコ・N・ワイデル（2008）「日本語における読み書き障害と文字列から音韻列変換時の粒の大きさと透明性の仮説」『ディスレクシア 読み書きのLD 親と専門家のためのガイド』，東京書籍，pp. 271-99.

（イェーテボリ大学文学部）